

萩原守衛 (中) 五

——その生涯と芸術——

中村傳三郎

二 画家を志して 下

——不同舎と明治女学校・在京時代——

明治三十三年七月、萩原守衛のもとには、巖本の新聞紙条例違反公判からの解放の喜びとともに、郷里の井口先生よりこの月下旬早々に上京する旨の便りが届いた。

やがて七月二十三日、井口喜源治は明後日からはじまる内村鑑三の第一回夏季講談会受講を目的に久方ぶりに上京した。講談会は内村の住居に近い新宿角筈の東京独立女学校を会場に十日間に亘って開かれるのであった。井口は総建坪「三畳半の大厦高樓也」とその狭さをいとおわず、守衛の深山軒を宿にしてくれた。師弟ははずむ心を抑えきれず、寢床は上と下にとは言うものの、殆んど肩すりよせての寝起を共にし、肝胆相照らして語り合った。二人は毎日深山軒に程遠くない板橋から汽車にのり、目白を経て新宿へと通った。この講談会は主としてキリスト教精神の探究鼓吹と伝道が目的とされたものであった。因みに、明治三十

五年の第三回夏季講談会の記念写真を見ると、講師陣には内村の他に大島正健、黒岩周六、津田仙ら、斯界錚々の諸先輩の顔ぶれが揃い、参加者約七十名の中には、小山内薫・有島武郎・志賀直哉や、のちのハス博士大賀一郎・同じく工学博士田中龍夫らの「若き日の姿」もみえて、この機会が後世の各分野に傑出した諸人物を送り出す大きな精神的母胎となった意義を見出すことが出来る。ところで井口も開講はじめての二十五日に始めて内村師に敬意を表しに尋ね親しく警咳に接する機会を得、十余年来の宿望を果たしたのだった。二人は毎日その日の演説のことを顧み、或いは聖旨のこと等について話題はつきなかつた。この期間、高揚した二人の心は合致して好都合な機会とばかり富士登山の計画がまとまった。心おきない井口先生と同道で、何はともあれ魂の浄化、そして現在の迷霧の中に改めて自分の前途をはっきりつかみとること、それが守衛の内心の願いでもあった。この際、思いきった生活の外科的な転換もはかりたい。それに東京生活ではじめて迎える酷暑に対する賢明な銷夏法とでもいえようか。富士から甲府を経て信州への帰省。——

有意義な旅の計画が出来あがった。

講談会は八月三日で滞りなく終了した。十日には巖本先生を誘って、守衛は東京近郊でもまだ僅かに「いなか」が残る王子方面への散策に井口先生を案内した。日頃、信仰の盟友ともいえる両先生のなごやかな交歓ぶりに守衛はいたく満足した。いよいよその翌日、井口と二人、スケッチブック一冊を忘れずに新橋駅を發った。まず鎌倉に途中下車、古跡を見物、続いて東海道を西へ下り、御殿場口から富士に登った。山頂での感動は筆舌に絶するものがあつた。ともかく大自然の靈氣の中に身も心も洗う思いだった。吉田口に降り、折から火祭りを見物し、「甲府の女丈夫」で通る林友恵女史に逢い、更に巖本から紹介された市川大門の渡辺澤次郎夫妻を訪ねた。まだ汽車の發達していない甲州路を北上、一路懐しい郷里をめざした。信濃路は長く険しかったが、この旅は自分の氣力体力を試す好都合な機会となった。以前患った心臓の方も別条なく何よりも体力に自信をつけたことが大きな収穫だった。

さて守衛は久しぶりで故郷の山々に接し、変らぬ流れにも心を洗った。だが旅の疲れをゆっくり癒すほどの余裕もなく、むしろ自分はこれからなのだという張りつめた思いが先行するのだった。例によって離れていてはできない身近な問題の処理に動きまわった。長らく不在中の義塾運営についての雑事にも労を惜しまなかった。

八月二十五日には禁酒会のこの月の例会が井口、守衛兩人の帰郷を好機として開かれた。井口は、上京の折に聞いてきた巖本の国民皆兵説や日本将来の二大事業、植林と水産について紹介し、守衛も同じく巖本先生の宗教的方面の考えを説き、併せて井口との富士登山のことどもを

披露した。

一カ月足らずの帰省であつたが、暑い夏も漸く東京ではしのぎ易くなる九月十日、守衛は再び郷里を後にした。先年の一人旅とはちがって、今度は上京の先輩格として何人かの知己を伴ない、犀川を途中まで舟で下り、新町を経て夕七時、篠ノ井の丸屋に投宿、翌朝一番の列車で入京した。森本旅館に落着いた同行者は望月友一、医学志望の西沢静雄、明治女学校入学のための望月菊乃らであつた。守衛はかねがね井口・相馬らと、この三人の前途については何かと熟慮を交わしていたのだった。殊に身体あまり強くない西沢と菊乃には、後々まで面倒を見つづけた。弱者を守り、援助する、それは特に巖本から受けた感化であり、喜びの一つでもあつた。このことは、ひいては研成義塾と井口への間接的な協力となるのだった。一行と別れた守衛は深山軒に帰校したのが九時、早速巖本校長に会い、帰省中の万端をかいつまんで報告した。

東京は未だ残暑も酷しかったが、不同舎での修業の仲間たちもぼつぼつと顔を出してきた。新秋に一段と氣をひきしめて守衛も従前通り通学をはじめたものの、やはり思いにまかせぬは画家修業、自分の画才については勿論、果して自分には何か他に才能があるのだろうか、天職とは何であつたのか、という根本的な疑問が再び守衛を悩ませ続けた。

秋もたけなわの十月、あちこち写生しながら守衛はふと思った。郷里ではこの頃、猫の手も借りたいほどの収穫時の忙しさ、皆々精出して働いているにちがいない。それにひきかえ自分は野外写生の名のもとにぶらりぶらりと遊び暮して無駄な日々を送っているともいえるのだ。いったいこれでよいのだろうか。守衛は何となく空恐ろしい氣さえしてきた

のだった。

折も折、十一月三日の天長節には義塾の同窓会がある旨の知らせがあった。加えて来る十一月一日から篠ノ井線が篠ノ井から西条まで開通することも知った。守衛は急に思い立って飛び帰りたいほどの衝動にかられた。しかしそれは断念しなくてはならなかった。代りに義塾同窓会にあてて、現在の自分の心境を次のような一書（十月三十一日付）に託すのだった。

「我が最も困った問題が第一我の天職と云ふ事である。我の天職は何であるか、神は我を何に撰び玉いしか。基督教で申します所の約束、生れざる前より既に知り玉ふ神は我を何になさしめんとて生ましめしか。人生五十七ア一日も早く此天職を見出してと思ふた事であります。又神はあらかじめ予言者になさんとして古来予言者となし、英雄偉人皆神の予め定め玉ひしものであると聞きました時に、我は殆ど失望落胆して、ア我はかく凡夫たるの予約に預かれるものなるか、ア然るか、と天に向ふて訴へました。若し果して神品能品すべて皆各神の予定の中にあるならば、如何に我れ苦心するとも水泡たるにはあらざるかと幾度か此問題の此処に参りました時に幾度か我はつまづきました。然し乍ら之れ根本的誤りであった事を漸く此頃に至り、或る先生に出問の末やと胸に落ちまして、かかる愚な問題について永くさまよふた事をくやみました。

ア天才、天才とは我師如雲先生の即ち天之を与へ、人生れながらに之を稟くるもの。天の人を地上に下す豈この恵を与ふるに平ならざるの理あらんや。人各己其聖なる天職を稟けて世に臨む。然して何故ぞ一は英雄偉人となり、一は凡夫となつて睡るは。只之れ一つは天賜ふにしたがい、一つは之れを捨てたるのみ。然らば各自其好む所に偏傾せよと云ふか、之れ又大誤りたるを免かれぬ。嗜好のみが天才と思ふものもあるまいが、もし

あらば大なる間違である。それ天必ず我に恵与せるの天才我にあり、然りと雖も然れ共、神が何を以て我に与へ玉いしかは我々の知る所にあらず。古来大予言者、天聖の栄名をになふの仙聖、彼等は多く牛を馭し、手に鉞をとつて立ちし人にあらずや。今や天下の大半に渉れる基督教の祖イエスは、ア彼は大工の子にあらずや。主イエスの撰み玉へる愛弟等は多く皆海辺の漁夫ならずや。ここに於て境遇の如何をかこち、天賦の吝なるを恨む如きに至は、実に不遜の極である。かく考へて来ると撰み玉ふ事は神の御意にして、我等に於ては唯専心精意静慮黙想、異例特長の修養鍛練、其信を伸ばして神命の臨むを待つにあるのみ。（略）神の命に従へば一瓢の飲一塊のパン、道を楽しむ仙者最も可なり。神命のまゝならば現在に於て位置の高きを求むるも可……。」

いつもながら守衛の悩みを解明してくれるのは巖本の講話であつた。この書面で語つたように、日々の生活の精神的裏付けを得て喜ぶとともに、心は晴れ勇氣は増した。更に「我の天職」の意識を強くもつて、画業を真に自分の問題として組み入れようと思うのだった。

明治女学校構内の一隅に寄寓してからまる一年が経過した。「爾来一年、何の為すなく、得るなく、努めし事もとよりなく、我は閑日月を送れる？ なりき。」と自戒した。そればかりか、ここ一月程というものの、守衛の心の一隅に気分的にすっきりしないしこりがわだかまっていた。

それは、ある信頼する友の厚意のままに禁酒の決意を破り、盟友を裏切つて一杯のビール、二杯の酒を飲んだことであつた。禁酒会は禁酒することだけが目的ではないといつかも大きな口をきいたことがあつたがやはり一旦心に誓つたことを破つたという自責の念が強まってきた。まして井口先生が去る七月、昨年五月南安曇郡豊科村外四ヶ村組合高等小学

校教育費中へ些額の寄附をしたのに対して木杯一個下賜の御沙汰があったのに、井口は飲酒元来の弊害を説き、「杯ハ此酒ヲ盛ルノ器ニシテ木杯ノ下賜ハ暗ニ酒ヲ寓スルモノト覚エ……」鄭重に恩賜の木杯返上に及んだ事情を鑑みるにつけ、尚更「我乍ら其意志の薄弱に怒り泣く」後悔であつた。禁を犯した自分はやはり「囚人」である。「囚人再伸す。呉々も人間の意志弱きものぞかし。諸兄幸に我に鑑み我二の舞におち入り玉はざらん事之れせめてもの願望に有之候。」と、十一月三日天長節の夜を潮時に、井口と東穂高禁酒会に宛てて告白懺悔したのだった。「月余の妖雲を払」って守衛の心は幾分軽くなった。改めて自己超克の努力の必要を知りその実践の決意を新たにしたのだった。「野外写生うまくゆかず困り居り候」という状態も、まず心すべき克服の目標となった。

この年も歳末が近づき冬の気配が濃くなってきた。「冬は彼の冷刀を振って汗くさき空気の洗浄につとむ」季節を迎え、「此時將に修むべし」という家に籠って冷静にものを考える守衛にとって楽しみな時期、ふつと故郷の炬燵が懐かしまれた。義塾のことは井口の決断によって小校舎を新築することになり、すでにそれが具体化していた。それは「内村先生をして失望せしむる無からん様」で、喜ばしいことだった。相馬良は十一月二十六日、長男安雄を出産した。目出度いことだが産後の肥立ちが思わしくないと聞く、大丈夫だろうか、などと案じるのだった。こちらでは早や今年も余日少なく、上京二度目のクリスマスの準備にかかる時期となつてしまった。何かなし、この東京でのクリスマスも今年限りのように思え、守衛は日頃の煩雑事から出来るだけ解放された楽しい想い出となるよう馴染の女学生たちと共に準備に精出すのだった。身近な

問題を着実に処理しながらも、行末の天職をいま一層明確にしようとする焦慮の気持が強くなってきた。一方では女学生たちとの楽しい交遊生活があるにはあるが、これが守衛の求める「天職」をばかす麻薬のように思えて悩むのだった。

年が明けて明治三十四年、新年早々守衛は心機一転の大決意を表明した。明治女学校では旧臘来、運営基金の寄附を仰ぐため、明治学院出身の教師川井運吉をアメリカへ派遣しようとする企てがあつたが、それが愈々本決まりとなつたのである。守衛はこの好機を逃して、いったい何時現状の転換をはかることが出来るだろうか、と熟考した。何はさておき、まず巖本先生に相談をもちかけた。総てを忘れた画家修業である。

巖本は一途に「天職」に向かう守衛の熱意に賛成した。あとは家兄の意見一つで決まるのだ。一月十三日、守衛は近く帰省する旨を井口に書き送った。「(略)兄もさぞ不賛の事とは存候へ共、ドーズ一つ寄合に勤めてヒ下度候。(略)恐入候へ共西沢兄と相馬兄丈に一寸御話しおきヒ下度あとは大秘密の中に願度候。」というのであつた。

今年も通学をはじめようとする不同舎では、塾主の小山が昨夏守衛の帰郷中の七月二十八日から渡仏して留守であつた。帰国はこの三月になるという。自学自習にまかせる主義とはいふものの、やはり小山不在の不同舎での勉強は何か心もとなく、写生も思うようにいかなかった。いっそのこと直接欧米の美術界に身を投じて洋画技術の「本場仕込み」に苦学するのが最善の道ではないかと考えるようになった。一方女学生との交わりは、必ずしも「身の危険を感じる」のが本音ではなく結構楽しいものだけれど、そこから今後の画業にプラスするものが生れるように

は思えなかった。ともかく、これまでいわば順境そのもので惰性に流されがちな現在の飽きたらない生活に一区切りをつけて、身も心も欧米の別天地におき、そこで専ら天職の可能性を試したいものと思った。守衛はこの決意の表面的な経緯を井口に報じ、真意を披瀝するのは近く帰郷面会の節に待つのだった。この手紙を執筆中にも親しい女学生の来訪があり、途中で筆を休めた。「今や渡辺姉等のオシルコの御馳走を終りて十三日十一時したたむ。要するに生は心機一転し苦心がして見たく候まま」と結んだ。

一月十六日、守衛は井口への手紙を追うかのように直ちに巢鴨を出立した。川井の出発予定日が二月九日と見込まれている以上、一刻も猶予できなかった。道すがら雨を突いて、篠ノ井に一泊、ここで去る九日に郷里の古河に帰省した若生に手紙を出した。若生も深山軒来訪女学生グループの親しい一人だったから。十七日には郷里の人となった。東京の雨は信州では雪であった。降り積った一面の白雪は凍てついていて。吐く息も氷る程の厳寒であった。十八日からは郷家の者はもちろん、井口・相馬・西沢・丸山らの同志、白金の兄穂一、踏入の兄らの親戚一族が次々と来訪し、守衛自身もそれぞれの家を探ね、賛意を求める日が続いた。十九日は井口の家泊った。電報で知らせた望月直弥も午後一時頃には駆けつけてきた。「絶快の一宿」であった。二十日には相馬宅に有志が集って談合した。二十一日、只事でない守衛の熱心さばかりでなく周囲の人たちの賛同意見も盛り上って、家兄もあっさり折れざるを得なくなり、いよいよ守衛の渡米は本決まりとなった。祖母のまさは愛育した馬を手放した代金を旅費の一部にと差し出して孫の壮途を祝福し励ま

すほどだった。村の禁酒会でも緊急に会員の意向をまとめ、二十一日には盛大な歓送会を開いてくれた。二十二日は西沢の家に一泊手厚いもてなしを受け、夜を徹して「ねものがたり、つきぬうらみ」だった。翌二十三日は兄穂一のもとに泊った。しみじみと温かいもてなしであった。二十四日は近親に挨拶廻り、踏入の伯父も態々家にまで来てくれた。二十五日はもはや帰京という慌しさだった。十日間はあつという短かさ、名残り惜しくもあった。井口は守衛が郷里を去る朝、西条駅まで見送りに行きながら、少しのことで間にあわなかった。早速その心残りを書信した。

「不覚とは我方の事。御手紙に接し読み行く程に冷汗背を湿す。先生の御心切今更申す迄もなければど後を追ふてかの泥濘を踏んでかの辺り迄送り給ひしか、西条発車の其時も窓より送られし諸君に目礼せし時に如何にさむしき物足りぬ情も我胞衣に湧き来れるぞ。

我自ら落付ける如くなりしも種々準備の気にかゝり候まゝ、遂に粗忽の事のみにて故里を辞せし事のくちをしさよ。誰なくも先生に送ってほしかった。別れに臨んで先生の一言の御言葉をはしかった。列車の将に発せんとして諸君の見送り玉へる時の想出かくありし。もったいなや此時此期先生は多分我腰かけて写生せる其石に腰かけて……。あゝ其石に腰かけて握飯かじり玉いしか。其頃我行は西条を發せしか。でもすまぬ事いたしました。さりながら人間万事塞翁が馬とやら。

出立前に今一度とはとの御手紙は我に無限の或感を与へ候。先生にしてかく思い玉うもの、我如何にしても今一度と存じ此一言は我をして、如何ばかりよろこばしめたるよ。我は必ず相見ん事を期す。」

いうまでもなく常に誠実で親身さあふれる井口の心、この渡米決定も

井口の支持あってこそ成ったもの、希望と不安に揺れる守衛にとって当面最も確かな支えになるのが井口の真心なのであった。小諸に一泊して着京は翌二十六日であった。折よくその日は女学校の親睦会が開かれる日に当たっていた。守衛も出席した。久しぶりで親しい女学生数人には自分の決意をそれとなく告げた。尚更この充足感ともお別れかと思うと多少寂しかった。しかし翌日から出発まで十数日、これまでもあまり出来なかった東京見物を心がけ、同時に世話になった諸名士を尋ねることを思い立った。二十八日には海老名・内村・新井・小此木らの家をめぐり、自分の意中を披露した。新井奥蓬は渡米尚早だといって強く反対した。

美術学校を出てからでも遅くない、というのだった。二月三日は、米国に滞らないし旅行した経験者を尋ねてみた。午前中には津田梅子を訪問、フィラデルフィアへの紹介を得た。次いで午後には四、五年前守衛と同じ目的で彼地に渡り米国に二年滞在後西欧を廻って二年前に帰ってきた新進の水彩画家三宅克己を訪問、この人からは大へん実質的な意見を聞くことができた。三宅は桑港にとどまることは好ましくなく、ニューヨークに直行してここで勉強するのが第一だとすめ、経費の点でも桑港へ行くよりはニューヨークの方がずっとやすく、直行ならば汽車船賃共百五十円位ですむと教えてくれた。そこで守衛は断然ニューヨーク直行の事を決心したのだった。「此人こそ我為めに実に有難き恩人候。」と感謝した。またその足で長尾のもとを尋ねた。彼は守衛の決行を大賛成し大いに慶んでくれた。

自称「すがもの大馬鹿者」は、これら訪問の報告と共に、家兄にあてて携行の身のまわり品を遠慮がちに要求し、その準備を重ねて依頼し

た。その中には三宅からの微笑ましい注意もあって、日本服で招かれる場合など多い故、羽織袴一通りを携帯してゆきたい、それも上等の下等というのでなく何なりと「折目ある品一カサネ」という調子だった。出発日が迫ればますます故里の味、季節の味が恋しくなる、「其節大町の氷餅少々御送りを乞ふ」とも書き添えた。

四日には、予定された川井の出航が最初には九日、或いは中旬の十五日と見込まれていたのが、川井の都合によって当分延期されることが判った。守衛は内心ほっとした。その晩は上京中の親友西沢築を伴って巖本を訪問することになっている。出発が延期して、明日帰郷する西沢とも、そして女学生たちとも幾らかゆっくり別れを惜しむ心の余裕が出てきたように思った。約束通り午後六時巖本を尋ねた。それは西沢の知識を肥やさせる友情であると同時に、まもなく膝下から離れる巖本の話を充分聞きとめておきたいからであった。「今夜は小生の為実に記念すべき一夜に候。」の巖本宅訪問の様子を早速井口に報じた。

〔略〕愛友西沢は今夜限り暫く別れに候。西沢が明日立つとて先生の御宅に肉で二人して招かれ六時より九時迄、

一、人格的神 一、本体

一、歴史の人物 (一) 太閤、足利、家康、北条、清盛、(二) 正成、

重盛、道真、(三) 藤樹等

一、死 一、進化論 一、天文学

等の事質問いたし皆満足の答を得実に感謝の情禁ずる不能。又筆紙に尽し難し。

西沢兄は何も質問せず唯黙してのみ候へば先生より

一、道德と宗教の關係

一、心の自由……宗教中心に突入す……

等実に親切に御話と下誠にうれしく有之候。死の事の御説明の如きは唯感服の他無之候。死は唯一、死とは此肉体の死のみならず一度死を味うて然して後永生あり、永生を悟れる人の心裏如何等の事にて之れは唯すじかき故之れに依て西兄より御聞取と下度願上候。」

翌五日には西沢の帰郷を王子まで見送って幾年かの別れを惜しんだのち、六日からは少し落着いてまだ殆んどはじめてといつていい東京の街を広く見物しながら渡米準備にかかるのだった。九日には玉生が訪れ、夜を徹して楽しく語り合った。渡辺と清水は連日競うように深山軒を訪れた。かたくるしい門限がない上に守衛渡米の手伝いという名目もたつことだから、二人は毎晩おそくまで守衛をなかに語り合い、徹夜に近い日も十幾夜続いた。二十四日の日曜には三人で梅見に出かけた。千住花屋敷から木下川を経て亀戸・言問・吉原と歩き、「生涯一度の……」であつた。帰つたのは夜八時を過ぎていた。守衛にとって梅の花ともしばしの別れだった。二人はその後も寿司・白酒・リンゴなど、何かと気を配っては持参して来宿し、名残りはつきず徹宵に近い日々を重ねるのだった。

三月二日には若生も来訪、再会を喜んだ。三日は巖本・青柳の両先生と露草兄と東京座に福助を観にいった。芝居見物などというのは守衛にははじめての経験なのであつた。ゆくまでに日本の伝統歌舞伎をみせておこうとする巖本の親心からだった。それから三、四日のうちに、いよいよ来る十三日に横浜港出帆の便で発つ連絡が川井からあつた。続いて八日には横浜の牧野氏の尽力で船の切符を手に入れてもらった。神田の兄本十は帽子から名刺その他細々としたものを取揃えてくれ、嫂の玉も

何かと気を配って女ならではの心尽くしをしてくれた。旅仕度について巖本はじめ皆々の一方ならぬ協力に守衛は頭が下がるばかりだった。

もう出発も間近い三月九日、「記憶すべき一夜、清水来らず。」というものか渡辺一人の来訪であつた。二人とも守衛とは年齢的にほとんど開きがなかった。だが平素はいちずに無邪気な交わりであつた。強いていえば渡辺はある面で日頃非常に積極的なところがみえたが、さて彼女の格別な熱意に守衛の気持は圧倒されたものか、「月夜密かに巖本先生を見る。」たとえ精神的な域を出るものではなかったにせよ、守衛はその夜将来を言い交すことになったのかもしれない。渡辺は真剣だった。それ故、このことが渡米後の守衛を悩ませ、また彼女自身をも苦しめることになった。

渡米に先立ち、二月二十七日、守衛は巖本の教えに従いキリスト教徒としての正式な洗礼を受けた。これが別に彼を強く拘束することはない。これまでに至る彼の生活に一つの区切りをつけるという意味があつた。出来るだけ過去の生活を払拭しすっきりした気持で出発に臨みたいと思つた。

遂に出発は三月十三日と確定した。しかし守衛は具体的に計算すると、ニューヨークに直行して生活を立てる費用がまだ不足しているのではないかと心配になった。守衛はひそかに郷里の相馬と兄穂一にその借入方を急信依頼した。それは直ぐ井口にも知れた。井口は、無理は禁物、数カ月出発を延期するか、あるだけの費用で何とか賄っていくべきだと忠告した。だが守衛は身体の様子もまだ充分良いとはいえず、果して働きながらの苦学にたえられるかどうか、万一の場合を慮って、無理

な無心に及んだのだった。そんな外国での苦勞をするよりは、従前通り数カ月、いや数十年になろうとも東京で悠々と勉學を続けた方がよいのかもしれなかった。それは守衛も考えた。しかし事はもうここまで運んでいるのだ。今更引込む気にはなれないのだった。もし両兄からの援助金が得られず、これだけの費用ならば、それはそれまでのこと、桑港までで辛棒し、そこで一働きすればよい。かりにニューヨークへ直行できたとしても、「物事は行くさきさきではづるもの、如何の境遇に陥るや之れ予め期し難くなれ共我は安心して参り申すべく、天若し我に用なしと思召さば今にても我を取り去り玉はん。又御用ある身ならばたとへ船は覆る共ロッキーマンは崩るるとも敢て恐るるにも足らざるべしと確信」するほどの若さがあつた。「今度故國を辞する上は事の成敗は我に意なし、唯心も梅の花にもとのみ祈る所」だつた。

三月十二日、明日に横浜出帆をひかえたこの日は好天氣に恵まれていた。かれこれ一年間住みなれた深山軒ともいよいよ別れなければならぬ朝を迎えた。早朝守衛は、「窓には月も雲に入り 夜は闇々し丑の刻若き火災に物すごふ 道照らされて寄る羽虫」昨夜来、徹宵に近い一同の送別の集いのままに泊ってしまった清水・渡辺と共に起床した。すぐさま車をかつて、世話になった明治女学校の先生数名のもとに暇乞をして廻った。終つて深山軒に戻ると、清水・渡辺が最後の別れを惜しみに來ていた。暫らくは互いに意中を察して無言、今更守衛に何が言えようか。だがいつまでもこうしていられる場合でない。守衛は涙を呑んで庵を出た。振り返ると見送る二人の姿が悄然として見えた。「つぶるる胸を引立てつつ」守衛は巖本宅を尋ね、しばらく話して別れを告げた。と

ころが、「いづれは再び見るべくも思はれざりし」清水が涙ぐみながら追ってくるのに出逢つた。守衛は、躍る胸をおし静めて問いかけようすると、相手が先に口をきつた。「富岡さんがね、本を返したいんですって……、是非もう一度丁々書屋（深山軒）に戻って下さい。」一瞬守衛は帰るまいと思つた。だが後髪にひかれる思いもたち切れず一緒に戻ると、そこには玉生と渡辺がいるだけだつた。玉生がまず別れを惜しんだ。あとは互いに言葉が途絶えた。守衛は再び車を駆つた。神田柳原で服を求め、本所の兄のもとで衣更えて身支度をととのえ、新橋午前十時九分発列車で横浜に向つた。車中では十数日來の殆んど徹宵の被勞がどつと一時にきて、何もかも夢うつつのままに過ぎ、十一時十分横浜着、すぐに牧野宅を訪うた。ところが予想だにしなかつた「かみなり」が落ちてきた。「シカタがないなあ！何故昨夕こないのだ、檢疫がとても間に合わぬ。……とにかく和田彦へ行け！」既に愛想を尽かしていた牧野の叱言だつた。急いで行つた。果して檢疫には間に合わなかつたことを知つた。守衛は一時茫然自失の態、「落胆、失望、残念、また一船後れざるを得ぬか、アア」と歎息した。然し氣をとりなおした守衛は旅行券の都合もあり善処方を頼み、一縷の望みをかけて午後六時迄牧野宅で待機することにした。取急ぎ巢鴨・神田にその旨電報もうつた。成り行きを牧野と共に神の摂理にまかせながら遅くなつた昼食を済ませ、疲れを癒すべく横になつた。横浜駅着後、いつのまにか経過した二時間だつた。僅かの時間内ではあつたが、胸底にはこの間に起つた数々の事どもがぎざまれていた。もう一度巢鴨に戻りたいが再三の悲しい別れは一層苦しみが増すのではないかと守衛は眼を閉じてじつとこらえた。

明治三十四年三月十三日夕刻、愈々日本と暫らく別れる時が来た。数え年二十三歳の守衛は横浜和田彦楼上で巖本（如雲）・青柳・湯谷（紫苑）・家兄（本十）らと別れの言葉を交した。これら世話になった人々の情愛の深さ、希望と不安の混淆、守衛はいつかなし臉に滲む涙を拭った。

夕陽がまさに没せんとする頃、守衛は船上の人となった。既に靄はあたりを包み、紫雲は埠頭をかすませ、最後の別れまでにと見送ってくれる四人を乗せた小蒸気船が香港丸を離れた。正に六時、「ススリ泣く様な汽笛」が一声、両船が東西に刻々と距離をました。「唯見る舳頭、コートを翻し、太きスチックを携へたる長髯の老仙影（註―巖本）、帽子手巾を振る影も、夕暮の暗に包まれて半時ならず見えなくなりぬ。」守衛は最後まで甲板で眺め尽くしていたが、「愈々何も見えぬと思ふた時急に闇に成った様に感じて、何となしに涙がこぼれ」るのだった。「ああ又何時かは如雲先生の膝下に眠らんか、有美先生の温顔に接せんか。」「ああ十年！」と心の底に独りつぶやいた時、守衛は「希望と失望の間に佇立」していた。

付記

この第二章「画家を志して——在京時代」の叙述を終るに際して、特に活用させて頂いた未公開の文献資料について紹介しておきたい。それは『明治三十二年日誌』のことである。この日誌は、縦二〇糎×横一三糎（約B6判大）の横罫、紙数四六枚とじのノート全頁に亘ってインク縦書でしるされている。

内容は、第一頁はじめに「日誌 明治三十二年十月二十一日より 重要問題のみ」とあり、数行おいての一行に「雑記録」とあって、更に行を改めて、「十月二十二日、日曜日・晴」「相馬兄と麴町一番町教会に植村正久先生の説教を

聞きに行く、……」からはじまり、以後月日を逐って、「明治三十三年二月十一日 紀元節式上にて」の巖本校長の講話概要の記事で終っている。即ち守衛が明治三十二年十月二十一日に上京してから約四カ月間にわたる主要な動静が詳細に知らされるものである。この日誌は、既に幾つかの守衛研究資料書によって公けにされている『明治三十二年日記へつくまの鍋』と一体をなすもので、この方は「重要問題のみ」とあるように、守衛にとって特に感銘深く、有意義だった事どもや、植村正久・内村鑑三・海老名弾正・山室軍平ら、キリスト教関係諸先輩の説教談、殊に明治女学校における巖本善治の聖書にもとづく講話とそれに対する守衛自身の感想などを克明に筆録している。従ってこの分野の研究者にとっても意義多い参考資料となるだろう。当資料は筆者が昭和二十五年三月、当時守衛の生家に設けられていた旧礫山館より借用し来り、必要部分のみ筆写しておいたものによった。

次に近年、同志社大学人文科学研究所（キリスト教社会問題研究会）の諸氏の努力によって公刊された、井口喜源治と研成義塾に関する完璧な基礎資料の紹介も大いに参考とさせて頂いた。

特集・松本平におけるキリスト教——井口喜源治と研成義塾の資料年表——

『キリスト教社会問題研究』第十九号（一九七一・三）

なお、この章の（上）を執筆後に、東京女子大学比較文化研究所教授として在職中（昭和四十二年停年退職）から十余年間にものぼる研究成果をまとめられた、青山なを女史による『明治女学校の研究』の発刊（昭和四十五年一月二十日「慶応通信」発行）を知った。この労著には、明治女学校について最も信頼のおける関係資料書として大へん役立たせて頂いたことを記して謝したい。